

戦時下に描かれた絵画（ ）

- 女流画家・長谷川春子「少婦國を防ぐ」調査と周辺

はじめに

第二次世界大戦時には、多くの記者や作家が従軍し、記録や戦争絵画が残されているが、その多くに触れる機会も未だ多くはないのが現状である。今回、住友資料館に収蔵されている、いわゆる戦争絵画の中から数点を選抜し、その技法、状態調査や、作家や作品に関する調査を進めて来た。

今回の調査研究では、女流画家、長谷川春子が戦時下に描いたとされる未発表の油画「少婦國を防ぐ」を研究し発表する。小説家、長谷川時雨の姉妹としても知られる長谷川春子は、鍋木清方や梅原龍三郎に師事した画家で、フランスでは、藤田嗣治たちとも交流し作家活動のいっぽうで、戯画漫画のエッセイストとしても活躍した。戦時下では「女流美術家奉公隊」を結成し、その理事長として桂ユキなどを誘い、国策に乗じた活動をおこなった作家でもあった。

本論では、「少婦國を防ぐ」の修復をおこない、明らかとなった原画をもとに、女流画家、長谷川春子の戦前?戦後の活動にも触れ、奔放な画業や自由な表現で知られる春子の絵画とは異なる、大戦下において制作された女流画家の希少な未発表作品の研究を発表するものである。

1. 長谷川春子（1895-1967）と美術活動

明治28年（1895年）2月28日東京日本橋に7人兄弟の末として生まれた春子は、後に劇作家小説家、随筆家となる長谷川時雨（本名ヤス）の妹であり、姉の時雨から多くの影響を受けた。春子は、高等女学校を卒業し、絵画に興味を持ち、鍋木清方に師事、その後、清方から川路柳虹を介して、梅原龍三郎に師事した。1929年に渡仏。藤田嗣治を訪れ、交流を持つ。1929、30年にはパリのザック画廊で個展を開催した。当時、姉の時雨が発刊した「女人芸術」誌では、春子が美術部門を担当した。巧みな漫画を描いたり、さまざまな企画の立案によって、春子の紹介した作家たちが表紙を飾った。また、陸軍・海軍の協力を得た、慰問文集「輝く部隊」の表紙を春子が担当し、華やかな表紙を飾ったりもした。仏より帰国後には、国画会展に《笛吹き》など数点を出品。11月には滞欧作品展を東京で開いた。国画会や、朱葉会に出品。1936年には三岸節子、藤川栄子、島あふひらと女流画家7人で七彩会を結成し翌年まで2回展覧会を開催した。

2. 「少婦國を防ぐ」作品と戦中戦後の活動

2-1 女流美術家奉公隊の結成

日中戦争の勃発後、1937年と39年、新聞記者とともに蒙古や中国南部まで取材旅行を慣行した。1943年、太平洋戦争の最中、「女流美術家奉公隊」を結成。春子は、その長として、国策に乗じた活動を展開した。女流美術家奉公隊は、春子を委員長に、国画会、二科会、一水会、新制作派、文展に出品していた女性美術家を構成員に設立された。桂ゆきや三岸節子も会員だった。その活動は、母親に息子の出兵の志願を呼びかける展覧会などの開催にもあった。戦後、女流美術家協会に改編された。「女流美術家奉公隊」の残した画業には、合作として2点一組(186×300cm)の「大東亜戦皇国婦女皆働之図」(注1)等があり、春夏の部には、畑づくり、田んぼの仕事、海女さん、魚の仕分け、電話の交換、防空演習など、秋冬の部には、従軍看護婦、幼稚園の先生、郵便局員、長刀訓練など、女性が働く情景を描出した大作である。生き活きとしたパノラマ絵画であり、軍隊や戦闘がまったく描かれていない。戦時中の女性たちの生活を表現し「銃後の守り」を描き出した秀作である。

2-2 長谷川春子作「少婦國を防ぐ」

今回発表した「少婦國を防ぐ」もこの時期、1943年に長谷川春子自身が描いた作品であると見られる。画面右下には、縦書きで「大東亜戦争三年 長谷川作 H.H」と記されているようだ。署名部分には、4×18cmの大きさの紙片に、「女流美術家奉公隊 少婦國を防ぐ 長谷川春子」と記された紙が貼付けられている。戦後の自由奔放な春子の表現とは大きく異なり、「銃後の守り」を表現したであろう士気あふれる勇ましい女性を描写している。画面には、防空用の鉄兜を携え、大きな手袋のようなものを身につけ、何かのモーションを現すような動きが見られるが、何を表現したのか明確ではないものの戦時中の女性の闊達な活動を表現した作品であることには違いない。大きく描かれた人物のボリュームは、師である梅原風の雰囲気漂わせているようにも見える。X線による観察では、地塗りにX線が吸収され、絵具層の表現が明瞭ではない。絵具層はそれほど厚塗りではなく、またX線を透過しやすい色材であったことが見て取れるが、他の部分に比して頭部、とくに顔の部分が厚塗りに描かれている事は明瞭だ。肉眼での絵具の印象も、粗めの亜麻布の布目が明瞭に見える程度の厚みであるが、顔、頭部の表現に関しては、やや布目が塗りつぶされている程度の厚みである。右上がりの筆触が目立ち、褐色を基調として描かれており、向かって左方からの光を意識した明暗表現は、朝日が夕日を受けているようにも見え、また描かれた女性は上空を睨むようにも見える。画面の上方より10センチほどの空は、暗雲のような空が表現されており、この作品の印象を、やや暗くしているかのようだ。

3. 戦後の長谷川春子

春子は、戦後ますます芸術活動は活発になるが、終戦後に三岸節子から、女流画家協会の創立に誘われるが参加せず、国策に乗じた活動が戦後の春子の閉塞した状況がうかがわれるところである。しかし、その後は国画会にも活発に出品した。当時の春子の画風は、やはり師匠の梅原龍三郎の表現を見るような風情があった。しかし、単なる描写ではなく、自由な画面の構成や、ふっくらしたボリュームの人物には、独特の表現が現れている。過去に、エッセイや文藝の世界で独特の才能を発揮した「漫画」の影響も画面に現れているようだ。水彩、油彩など、絵画材料にとらわれる事なく、自由自在に筆を走らせている。晩年には「源氏物語絵巻」五十四帖を完成さ、没後には宮崎宮に奉納されている。1967年5月7日に72才で逝去した。

4. 作品の状態と修復

支持体は、亜麻布、平織。織り系数は1センチあたり平均縦9本横10本、画面の寸法は天地100.0cm左右65.5cm、木枠の厚さは2.0cmである。鉄製のタックスで、天地方向の木枠が2本、水平方向の木枠が2本、水平方向の中棧が1本の、合計5本から構成された木枠に張られている。亜麻布は、著しく酸化、脆化し、やや張りが弛んでいる。タックスも酸化し錆が発生している。粗目のキャンバスに描かれており、裏面には、本人による記述(「少婦国防 昭和十八年 早春 長谷川春子作」)が記されている。地塗り層は、白色で油性の色材が塗布されている。筆による表現は、頭部以外は概ね均質な厚さで描き出されている。人物を描いた部分には、細かい亀裂が無数に発生、亀裂に伴う絵具の剥落も見られる。さらに、画面の数カ所には加筆された痕が見られる。それらは紫外線蛍光写真の観察により明らかだ。加筆は、絵具の剥落等の上に塗りつぶされるように行われている。画面には天然樹脂系のワニス塗布されている。ワニスは酸化し、黄化している。今回の修復処置では、画面に現れている亀裂、絵具の浮き上がりへの対処と、支持体の補強処置としてストリップライニングをおこない、充てん、補彩そしてワニスを塗布し、原画に近い、均質な画面を取り戻した。

5. まとめ

今回の研究発表では、戦争の時代をまたいで活躍した一人の女流作家の活動とともに、未発表の戦争絵画の紹介をする場となった。当時は、名だたる多くの画家が戦争の記録を残すため従軍した事実がある。それらの作品の多くは未だ発表の機を逸している。まして女流画家の残した、いわゆる戦争絵画は、ほとんど出会う場も機会もない。当時描かれた作品で、一人の女流画家が鉄かぶとを携えた女性像をモチーフにした肖像は珍しいとはいえないだろうか。「少婦國を防ぐ」を知るには戦前、戦後の長谷川春子の作例を観ることで、その絵画の価値を推し量ることができるかもしれない。この作品は戦時下の闘争の記録や、当時の日常の生活を描いた風景画でもない。かといって、戦後に観られる長谷川絵画の奔放で浮世離れした画風とも違う。それは女流美術家奉公隊を牽引した彼女が産み出した、戦争へのプロパガンダなのだろうか。しかして描かれた人物は、師匠の梅原龍三郎からの影響の色濃い印象、さらに漫画にも長けていた彼女一流の、独特の風貌が表れていることは確かだ。

本研究の最初のきっかけとなったのは住友資料館の収蔵品の調査からだった。千数百点の収蔵品を調査した中で、数点、見逃せない作品が現れた。その中の一つに長谷川作品とともに現れた「戦争画」だった。どのような経緯で我々の前に辿り着いたか詳細は不明である。私共の工房にとって、長谷川春子の作品といえば、元東京女学館大学教授、尾形明子さんのコレクションの修復が最初の出会いであった。同時に栃木県立美術館の美術館展覧会のための修復で再び出会あうこととなった。そして三度目に、住友資料館の収蔵室ということになる。貴重な作品との出会いは、根気のいる資料の編纂なくしては得られないものでもあった。

最後に、この研究のための貴重なお話を賜りました尾形明子さん、さらに資料、文献をご提供くださり、また長谷川春子をはじめとする、多くの女性作家の記録をご教示いただいた、栃木県立美術館学芸課長の小勝禮子さんに、深くお礼を申し上げたい。

参考図版

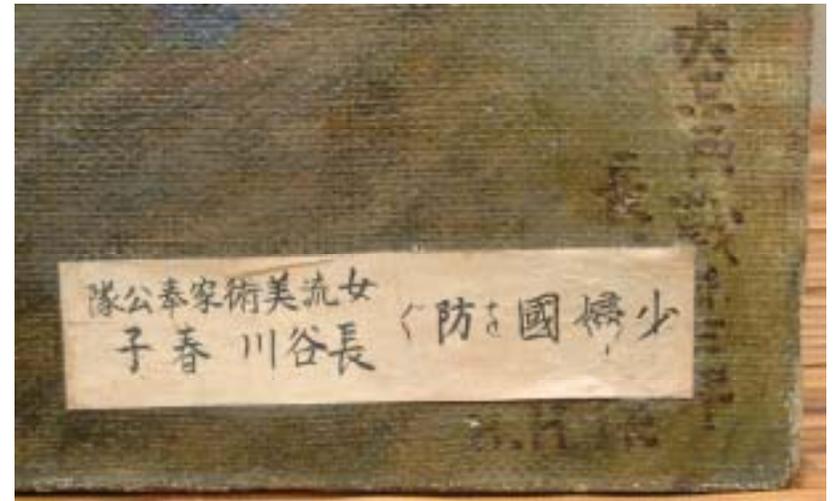


A ; 長谷川春子作「少婦國を防ぐ」

作品寸法天地100.0 cm左右 65.5 cm



B . 裏面



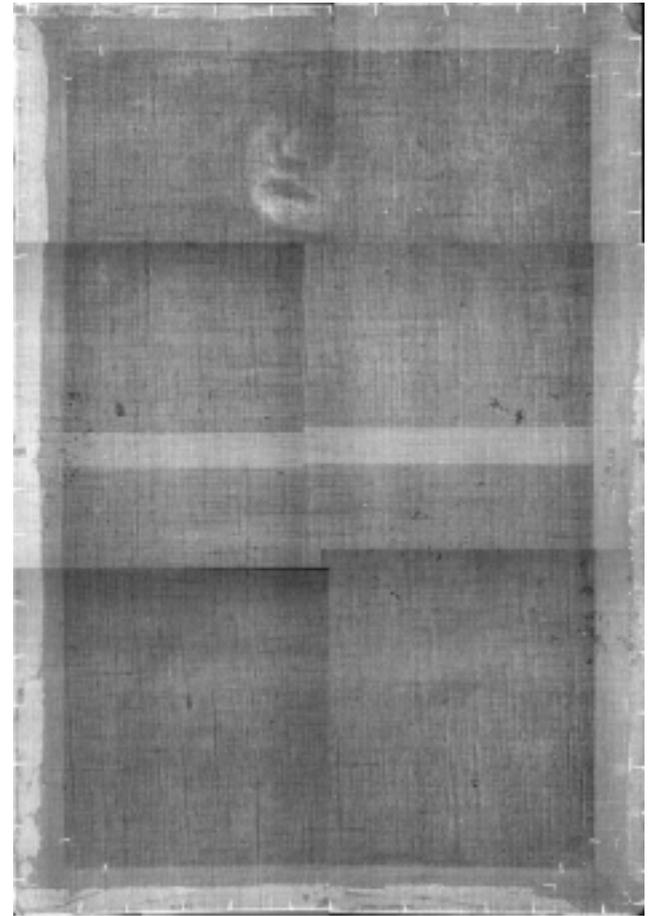
C . 画面右下隅・署名、年紀 貼付のラベル



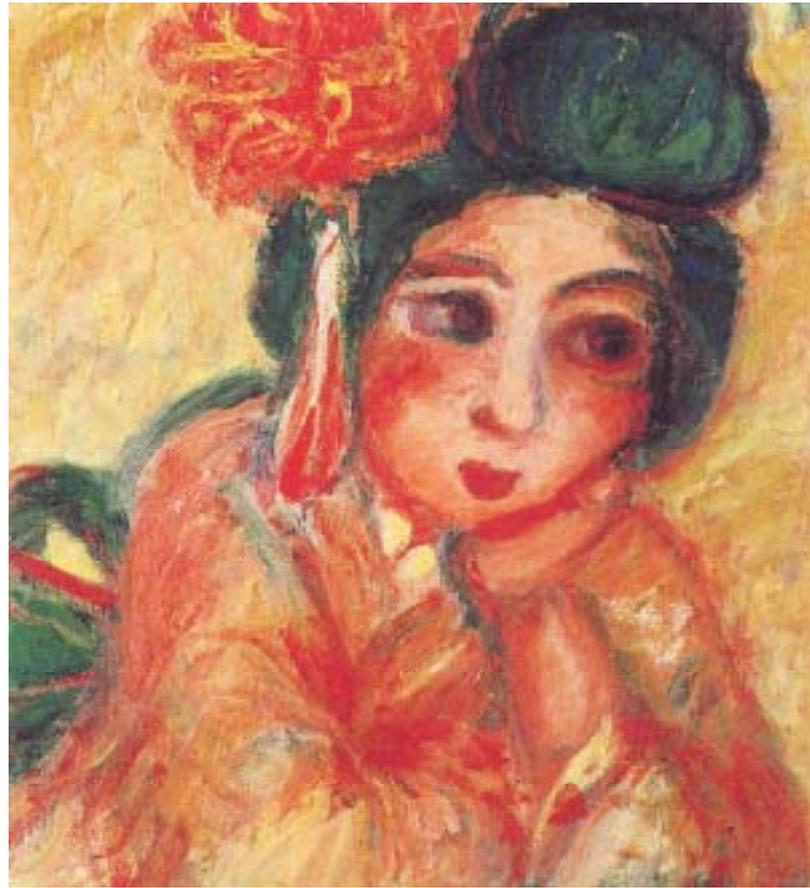
D. ノーマル写真・修復前



E. 紫外線蛍光写真・修復前



F. X線写真



G. 長谷川春子作「春余興」1936年 / 栃木県立美術館所蔵 H. 長谷川春子作「春爛漫」1952年

1952年「奔る女たち 女性画家の戦前・戦後1390-1950」より

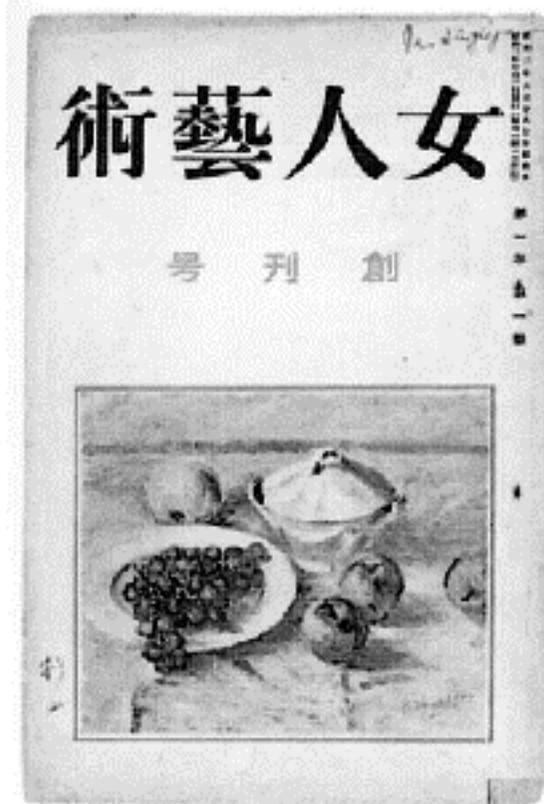


1 ; 大東亞戰皇國婦女皆働之圖 / 秋冬の図 1944年 靖国神社遊就館蔵



」。長谷川春子作「輝ク部隊」表紙昭和15年

「奔る女たち 女性画家の戦前・戦後1390-1950」より



『女人芸術』第1巻第1号 植原久和代



『女人芸術』第1巻第4号 吉田ふじを



『女人芸術』第2巻第2号 亀高みよ子

K ; 「 女人芸術」表紙 昭和3 年～ 「 奔る 女たち 女性画家の 戦前・ 戦後1 3 9 0 - 1 9 5 0 」より

参考文献： * 栃木県立美術館：「 奔る 女たち 女性画家の 戦前・ 戦後1 3 9 0 - 1 9 5 0 」2 0 0 1 ， 編集： 小勝禮子， 栃木 * 株式会社近代出版社：「 靖国神社遊就館図録」2 0 0 8 ， 靖国神社， 東京 * 岩波書店，「 イメージの中の戦争 日清日露から 冷戦まで」1 9 9 6 ， 丹尾安典・ 河田明久， 東京